
家出孤児

p p

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家出孤児

【Nコード】

N3935A

【作者名】

pp

【あらすじ】

親に嫌気がさして家出した純と天音。ちょうどその日に友達の手矢人も家出をしていた。増えていく仲間や減っていく仲間。苦しみを乗り越えて生き延びようとする子供達、そして恋。わけありの子供達の生活です。

プロローグ：仲良しの兄妹（前書き）

話の初めでは謎に包まれたところが多い作品です。でも、話が進むにつれてその謎は解けていきます。すごいどんでん返しもありますので、お楽しみに。ちなみに、純と天音の苗字は『木下』です！

プロローグ：仲良しの兄妹

夜中の人通りの少ない道路。そこを一人の少年が走っていた。名前は純、小学6年生だ。

身なりはきれいにしているが、洋服と上着が所々切れている。

彼は少し急いでいた。というより、あわてていた。

純はやぶの前で足を止め、横に並んだ木の数を数え始めた。

そして、右から5本目と6本目の間（木は10本ある）に入ってしまった。

それは外から見るとただのやぶだが、中に入ってみると広い森だった。

そこを右、左、右、右・・・という風に複雑な方向に進んで行く。しかし、純は全く迷った様子を見せない。

しばらく進むと、少女が現れた。彼女の名前は天音、小学3年生で、純の妹だ。

「お兄ちゃん、お帰り！」

天音の様子からすると、天音はお兄ちゃん子で、純も天音に優しくしているようだった。

2人は一緒に森の中を進んで行った。天音も全く迷っていない。（森から出て来たし・・・）

数分間歩き続けると、ひらけた場所に出た。まるで一軒家のリビンググのようだ。

その真ん中には大きな木の切り株があり、その周りには取り囲むようにして小さな切り株が7つある。

まるでテーブルとイスのようだ。というより、そう確定している。

純はイスに座ると、上着のポケットからチョコレートを取り出した。

「ほら天音、お土産のチョコ。」

その言葉を天音は聞き逃さなかった。

「わあっ！お兄ちゃん、ありがとう！」

そう言ってチョコレートを純から受け取ると、特別に長く伸びた草のところへ行き、その中にチョコレートを入れた。

草の中にはその他にも、数本の缶ジュースとスルメが入っていた。
「おい天音、そのジュースはいつになったら飲むんだ？早く飲まないと腐るぞ。」

と純が言った。しかし、天音はお構いなしに、

「消費期限ギリギリに飲むからいいわ！」

と言って、笑いながらジュースの消費期限を見ていた。

そんな天音を見て、純は微笑んだ。

「いつまでこんな笑顔が見れるのだろう・・・。」

そう純が呟いたが、天音は気づかずにまだ消費期限を見ていた。

「天音、歯を磨いて来い！そうしたら寝るぞ！」

純がそう言くと、天音は森のさらに奥へ向かって行った。

この2人はここに住んでいた。かなり昔から・・・。

ブログ：仲良しの兄妹（後書き）

実は、この作品は1度ノートで書かれていました。
クラスの友達には大変人気でして・・・。
それをリニョーアルして投稿してみました。
よろしければ感想ください！待ってます！

第一話：自分の家なんか・・・！

純と天音は裕福な家に生まれた。よそから見れば羨ましく感じるだろうが、この2人は違った。

父親は失敗をお金の力で解決してばかりで、とても尊敬できる人柄ではない。

母親は1日中通販ばかりしていて、家事や子供の相手は召使いに任せていた。

こんな親の姿を見ていられなくなった2人は、夏の朝早くに家を出た。

「天音、自転車持って行く？」

「うん。」

これが2人が家の前でかわした最後の会話だった。そう、ここに2度と戻るまいと誓ったのだ。

行く場所はすでに決まっていた。純と天音、そして2歳年上の友達の刃矢人しか知らない秘密基地へ行くのだ。

ここは人通りの少ない路地にある森（外からはやぶに見える）にあるから、人は入って来ないのだ。

それに、中は木がたくさんあり、それが寄り集まって迷路のようになっている。

ここまで家出に適した所があるのかと、2人は迷わずそこへ向かった。

森の入り口。右から5番目と6番目の木の間から中へ入り、何回も曲がる。

すると、リビングのような広い所へ出る。（普通の家のリビングの5倍はあるが・・・）

森の中はとても広いのだが、2人は1度も迷わずに進み続けた。

「・・・純か？」

基地から声が聞こえた。

「刃矢兄!？」

純がそう言っていると、刃矢人は基地から出てきた。そして、純の格好を見ると、

「純、お前もか。」

と言った。すると純が、

「う、うん……。天音も一緒。」

と呟いた。少し沈黙が流れたが、天音は状況が分からずに純に話しかけた。

「これから刃矢人兄ちゃんも一緒なの? ねえ、そうなの?」

純は返事をしなかったが、代わりに刃矢人が返事をしてくれた。

「そうだよ。天音ちゃん、よろしくね!」

刃矢人の声は、いたずらっ子のようなはつきりした大きい声だ。(

純とは正反対だ)

そして3人は基地の中へ行った。これからのことを話すために・・・。

第一話：自分の家なんか・・・！（後書き）

私はこの小説意外にも作品を投稿しているのですが、感想が全然届きません！

読者様、感想ください！お願いします！m（　　）m

第二話：商店街と天音の声

これから秘密基地で暮らしていくために、3人は何か仕事をすることにした。

「内職がいいよな。協力してできるから。」

と、刃矢人。いつもは大人を困らせている悪ガキだが、こういうときは知恵が働く。

「うん、いいね。そうしよう！」

その意見には全員賛成した。（もともと3人しかいないが）

「あ、それから、役にたつかなあとと思って、売れそうな物を持って来たよ。」

純はリュックからゲームやフィギア、きれいに扱っているマンガを取り出した。

「フィギアは全種類、マンガは全巻そろっているよ。」

種類、巻などがあるものは、すべてそろっていると高く売れるのだ。どれも男の子だけあって戦隊ものばかりだが、天音は興味津々だ。

「お金もたくさん持って来たけれど、節約したほうが良いよね？」

純は小学1年生だが、時々年に合わない言葉を使う。

「当たり前じゃねえかよ。足りなくなったら、俺達は生きていけねえじゃん。」

刃矢人も生々しい話をよくする・・・。

でも、これは最低限必要なことだ。3人は半端な気持ちで家を出たわけじゃあない。

夕方になると雨が降って来た。基地の上には木の枝が張り出して、いるが、雨はしのげなかった。

「うわっ、このままじゃあぬれちゃう。純、天音を連れてかさを買いに行こうぜ！」

「うん、わかった。天音、行こう。」

3人は近くの商店街に来た。おもちゃ屋から食べ物屋まで、いろいろなお店があった。

純と天音は商店街には来たことがなかったから、それぞれのお店をじっくり見たかったが、刃矢人にやめさせられた。

刃矢人の案内で、洋装店で壊れにくそうなかさを買い、木材屋に行こうとした。

しかし、木材屋の前で警備員に出くわしてしまった。

「おや？君達、こんな所で何をしているんだい？」

純は、とっさにごまかした。

「いやあ、お父さんにお使いを頼まれたので。」

刃矢人はこっそり、純に『ナイス！』とアイコンタクトをとった。それでも、警備員はしつこく問いただしてきた。

「君達の住所は？」

さすがの純も、いざとなると賢い刃矢人も、この質問には答えられなかった。

「純、天音ちゃん、逃げる！！」

刃矢人が走り出した。純も刃矢人の後に続いたが、天音は追いつくことができなかった。

「天音！」

純は天音に駆け寄ろうとした。しかし、刃矢人が引き止めた。

警備員が天音に追いついたのだ。天音は抱き上げられ、かさを落とした。

「だめだ。天音ちゃんはあとで家から連れ出そう。」

天音の泣き声が聞こえた。純は刃矢人の手をふりほどこうとした。

「放して！」

純は必死で頼んだが、刃矢人は聞かなかった。

「少しの辛抱だ。明日にでも連れ戻せば良い。」

刃矢人は純が天音の所へ行かないように、しっかりと腕をつかんだまま走り出した。

もう純は抵抗するのをやめたが、刃矢人は放してくれなかった。

何分走ったのだろう。純の頬に涙がつた。刃矢人は黙って走り続ける。

「もう・・・大丈夫だよな・・・。」

急にスピードが落ち、最後は止まった。刃矢人は息が切れているようだった。

気が付いたら、森の入り口に着いていた。雨は止んでいる。

「純、行こうぜ。明日にでも連れ戻せるさ。」

刃矢人は明るくふるまっているようだったが、元気がないのが目 で分かった。

「ほ、ほら。・・・今日はもう寝ちまおう。明日早く起きればいいさ。」

純は無言でしゃくりあげた。自分をコントロールできなかった。

「純・・・。」

刃矢人は純の背中に手をあてて基地までつれて行き、イスに座らせた。

「寝るんだったら寝たほうがいいぜ。俺はもう寝るからな。」

そう言うのと、かさをテーブルに立てかけて、アウトドアタイプの寝袋にくるまった。

純も寝袋にくるまったが、寝れそうにもなかった。天音の声が耳について離れなかったのだ。

「刃矢兄、おやすみ・・・。」

そう言うのと、刃矢人も小さい声で

「ああ、おやすみ。」

と返事をした。上を向くと、月の光がわずかに差し込んでいた。

腕時計が、7時16分を指していた。

第二話：商店街と天音の声（後書き）

感想ください！お願いします！

第三話：小屋

朝になった。天気が良いらしく、上を向くと木々の間から日光が差し込んで来た。

「ふあゝ。・・・あ、おはよう。」

刃矢人が起きた。

「おはよう、刃矢兄。」

純はたった今起きたふりをした。昨日は結局寝なかったのだ。

風がふいて森中から葉のこすれる音が聞こえた。今、始めて秘密基地が自然に囲まれた所だと思った。

「純、朝ごはんは何がいい？」

刃矢人はすっかり目が覚めたようで、自分の持ってきた缶詰をあさっていた。

「刃矢兄、缶詰よりもスナック菓子やするめを食べたほうが良いよ。」

純は生活に関する事は詳しい。

「じゃあ、そうするか。」

2人は消費期限が早いものを片っ端から取り出した。

お菓子セツト、ジュース、パン・・・

2人は消費期限がずっと先の食べ物を選んで持ってきたため、早いものはちょうど節約した2人分くらいだった。

「栄養バランスは良くないだろうけど、何も食べないよりいいよな。」

テーブルに並べられた食べ物を見て、刃矢人が言った。

たしかに、エネルギー（熱）の元となるものばかりだった。

仲の良い友達と、話をしながらの食事は楽しかった。

「刃矢兄、持ってきたお金で野菜でも買う？」

「そうだな。」

「天音はどうする？」

「きちんと作戦をたてて行こうぜ。」

2人は朝食を終えると、朝から商店街に出た。今度は警備員に見つかる前にお店に入った。

まずは八百屋。野菜を買うためだ。

「純、レタスとかばちやが安いぞ。」

買い物をしたことのない純は、刃矢人に買い物の仕方を教えてもらった。

これからのことも考えて、野菜は多目に買った。

次に、昨日行くことのできなかった木材屋に行くことにした。

「雨をしのぐための小屋をつくらうぜ！」

刃矢人は木を使った工作が得意だ。図工ではよく賞をもらっている。

2人は大きめの板、金づち、釘、ロープを買った。

しかし、板の大きさと枚数が半端でないので、2人で協力して持つて行くことになった。

「純、今日はうまくいったな。」

「そ・・・、そうだね・・・。イタッ！」

板を2人でいっぺんにかついでいるので、背の低い純に重さがかかるのだ。

「純、大変そうだな。早いところ基地に帰ろうぜ。」

「できるならそうしたいよ・・・。」

森の中は進むのに苦労した。板がつかえてばかりで、木を何本も傷つけてしまった。

でも、そこをぬけて基地につくと、刃矢人があつという間に小屋を作り上げてしまった。

「うわあ、刃矢兄すごい！」

小屋を点検している刃矢人を見て、純が言った。

「よくやっていたからな。」

小屋に色は無かったが、森にある葉を付けてカモフラージュする

と、とてもかつこよくなった。

純がたくさん葉をつけるから、完成した時には小屋は葉の塊に見えた。

「広く作ったから、今日からここで寝るんだ。」

刃矢人が自慢げに言った。きちんと床や玄関も作ってある。（げた箱はないが）

2人はさっそく荷物を小屋に運び入れると、寝袋を出した。

「ここからここまでが寝るスペース。残った所は生活スペースだな。」

「それだけで十分立派だったが、刃矢人は小さいテーブルも作ってくれた。」

「住む場所ができたからって、安心してられないぞ。気を抜くな。」

「うん……。」

それから2人は天音をどうやって連れ戻すか、作戦を立てることにした。

第三話：小屋（後書き）

この小説、目標は1日1話書くこと。これからもがんばって書いていきますので。応援よろしくお願いします。
感想もお待ちしております。

第四話：姉

作戦は、そう簡単にはできなかった。

純（天音）の家は、誰かが天音を連れ出すようなまねをできないよう、親が警戒していた。

もし純や刃矢人が玄関から行けば、家に連れ戻されることは間違いない。

だからといって、裏庭から天音を連れ出すことも無理がある

考えるだけで時間はどんどん過ぎていった。

「なあ、純。本当に天音を連れ戻すのか？」

不意に刃矢人が言った言葉に、純は何か冷たいものを感じた。

「絶対に連れ戻すよ。」

純の意志は固かった。刃矢人が何を言おうと、天音を連れ戻す方法を必ず見つけるつもりでいた。

ガサガサガサッ！

森の中に、誰かが入って来た。

「天音！？」

思わず純は声をあげた。しかし、刃矢人は純の口をふさいだ。

「違う……。天音じゃない……。」

確かに、天音は基地に来るとき、純か刃矢人の名前を呼びながら入って来ていた。それに、家出したせいで、当分家からは出してもらえないはずだ。

今のうれしさはどこかへ消え去った。そして、誰がここへ入ろうとしているかわからない恐怖感が純を襲った。

森の中にいる誰かは、何か叫んでいる。

「刃矢人ー！刃矢人ー！」

どこかで聞いたことのある声だ。そして、声の主は女の人だ。

「！！！！！！」

隣にいる刃矢人が後ずさりした。しかし、目は声のする方向を向いている。

「刃矢兄？どうしたの？」

刃矢人は大急ぎで小屋へ飛び込んだ。しかし、相手はそこまで警戒する必要はないはずだ。

ガサガサッ！ガサガサガサッ！

だんだん近づいてくる音と声。小屋の中で縮こまる刃矢人（窓からその様子がはつきりと見える）。

顔を上げた時、基地の端にいたのは女子中学生だった。

「刃矢人じゃない・・・？」

その中学生の髪は長く、目は輝いて見えた。おさげの髪型に、黒い学生かばんが恐ろしいほど似合っていた。

「あ、失礼しました。私は石井 沙由里。弟の刃矢人を探しています。」

その一言で、すべての謎が解けた。

ここにいる人は、刃矢人の姉。数日前に家出した刃矢人を探して、ここまで来たのだ。

「ぼ、僕は・・・木下 純・・・です・・・あの・・・刃矢人の友達です・・・。」

沙由里は純の顔を見て、につこりと微笑んだ。

「よろしくね、純君。」

それにしても、全く似ていない兄弟だ。刃矢人とはまるで違う。

「おい！」

小屋から刃矢人が飛び出して来た。

「何だよ、今さら。俺は帰らねーよ!」

そう言つて沙由里につかみかかる刃矢人。2人の身長ははるかに違う。

「あら、誰も帰つて来いとは言つていないわよ。」

落ち着いて対処する沙由里。

「じゃあ、何しに来たんだよ。」

力の弱まった刃矢人の手を服からはずす沙由里。目には涙がうかんでいた。

「話せば長くなるけど……。純君も聞いてくれる?」

「私と刃矢人は、お義母さんとお義兄さんにいじめられてたの。」

お父さんがいると何もしないけれど、仕事でいない間は、私達は思うがまま……。

それが嫌で、刃矢人は家を出て行つたわ。

でもその後、刃矢人がいなくなつて……。攻撃はすべて……私に……。来たの。

この前なんか……。クスン……。金属バットで……。殴られたわ……。

しかも……。お父さんが……。ヒクツ……。出張でいなくて……。ウツ……。

だから……。私も……。クツ……。家を出て来たの……。

それを話し終わると、沙由里はわあつと泣き出した。

「姉ちゃん……。」

その時、初めてわかつた。刃矢人はお姉ちゃんっ子だ。

「仕事でも……。家事でも……。何でも……。するわ……。

お願い……。ここに……。いさせて。」

よっぽど酷い目にあつたのだろう。よっぽど辛かつたのだろう。

よく見ると、沙由里の腕には無数のあざがあつた。

「いいよな、純。」

「うん。」

そう言つた刃矢人は、あまりにも元気がなかつた。

「ありがとう……。何か……。すること……。ない……。？」

刃矢人は気をきかして、純の1番望んでいた願いを言ってくれた。

「じゃあ、天音を連れ戻して。」

「わかつたわ……。私の立場なら……。できると……。思つわ……。」

確かに、家出したばかりの沙由里は、まだ家出したことがわからないはずだ……。

第五話：天音救出作戦完成

家出したことを知られていない沙由里と、運動が大得意な刃矢人、そして、知識が豊富な純。

3人で力を合わせれば、天音を家から連れ出すことぐらいたやすいではないか。

「沙由姉は、天音を遊びに誘って。天音が外に出られなくてかわいそうだと言えば、大丈夫だろうから。」

純は親の心理を大体つかんでいる。しかし、ここまで考えが深いのは並の1年生じゃあない・・・。

「んで、天音をここに連れて来るとのことだ！」

話を簡潔に終わらせる刃矢人。しかし、これだけではない。

「そこまで簡単じゃないわ。目的地や帰宅時間を伝えなければ、親が安心できないわ。」

沙由里は1番年上だけあって、大切なところを指摘する。

「簡単だよ。」

純は地図を広げ、基地の位置を指で指した。

「ここの森に基地がある。そこから中途半端に遠い公園で遊び、6時までには帰ると言うんだ。」

本当に、どんな勉強のしかたをすれば、ここまで頭の良い子供になるのだろうか・・・。

地図には13カ所の公園が載っている。

「じゃあ、やや遠い所にある『ふれあい公園』が良いんじゃない？」

「うん、そうしよう。」

「話についていけねえ〜！！！！！！！！」

なんとか作戦をたて、いよいよ実行にうつす時が来た。ここで、作戦内容を説明しておこう。

沙由里・・・午後２時に天音を迎えに行き、「ふれあい公園で遊んで、６時までには帰る。」と伝える。

純・刃矢人・・・ふれあい公園前の交差点に待機し、沙由里から天音を受け取って秘密基地へ。

沙由里・・・食事のための買い物をする。終わったら秘密基地へ。

このような作戦でいくことにした。うまくいくかは、それぞれの行動にかかっている。

第五話：天音救出作戦完成（後書き）

くれぐれも、この作戦を純の親にばらさないでください。続きが変わってしまう場合があります。（笑）

もちろんわかっているとは思いますが、これは架空の話です。上の注意を本気にしたりしないでくださいねっ！（^ ^ ;）

第六話：天音救出作戦実行（前編）（前書き）

『第六話：天音救出作戦実行』は、前編と後編に分かれます。だからとした話になってしまったかもしれません。

第六話：天音救出作戦実行（前編）

そして、いよいよ天音を連れ戻す時が来た。沙由里は天音の家に
行き、純と刃矢人は人目につかないところに隠れた。

ピンポーン

「ハイ、ドチラサマデスカ？」

天音の母親が出た。

「沙由里です。天音ちゃんと遊びに行きたいのですが。」

「スコシオマチクダサイ。」

思ったよりうまくいった。

（何か・・・何か違う・・・。）

沙由里は胸騒ぎを感じた。

「沙由里お姉ちゃん！」

家から出て来たのは元気な天音と、その母親の姿だった。

「この子をよろしくお願いします。あんなことがあったばかりです
から・・・。」

母親の様子からして、本気で天音を遊びに行かせるようだった。

「わかりました。ふれあい公園で遊んで、6時までには帰ります。

天音ちゃん、行こう！」

わざとらしかったかもしれないが、沙由里はわざと明るく振舞っ
た。

絶えず感じる胸騒ぎをごまかすために・・・。

一方、純と刃矢人は公園の隅にある狭いスペースにじっと座り、
天音を待っていた。

「ヒマで死にそうだよ。」

2分に1度は、刃矢人がこうばやいた。純は暇なうえ、刃矢人の独

り言（？）を聞かされていた。

正直に言くと、純は基地に帰らなかった。座っている所は日なたで暑かったし、人目を避けるために水は飲みに行けなかった。

「刃矢兄、もう少しだよ。もう少しすればきつと来るよ。」

時間が経つにつれて、刃矢人はばやかなくなってきた。ばやく気力が減ってきたのだ。

不意に刃矢人が立ち上がった。

「どうしたの？天音が来たの？」

刃矢人は純の問いかけにも答えず、ふらふらと水のみ場へと向かって行った。

「刃矢兄、だめだよ！僕だって我慢しているんだ。」

何とか刃矢人を引き戻して座らせると、純はポケットから小さいペットボトルを取り出した。

「水だよ、念のために持って来たんだ。飲んで。」

しかし、刃矢人は返事をしなかった。ペットボトルを取ろうとさえしなかった。

「刃矢兄？ほら、飲んでいいよ。……。」

よく考えればわかる状況だった。刃矢人は膝に頭をもたれ、手は力なく、垂れていた。息は苦しそうで、目は閉じていた。

（きつと脱水症状だ！）

「刃矢兄！しっかりして！もうすぐ天音と沙由姉が来るから！」

大きい声を出したつもりだったが、かれた声しか出なかった。

純は刃矢人の顔を上に向け、水を飲ませた。飲んでいるようだったが、これだけの水では足りないだろう。

沙由里と天音は何事も無く公園へ向かっていた。（歩いてふれあい公園まで行くのは少しきついが）

「沙由里お姉ちゃん、お兄ちゃんと刃矢人兄ちゃんいるの？」
当たり前のように、その質問をした。

「いるわよ。2人とも天音ちゃんに会いたがっているわ。」
明るく、明るく・・・そう考えているのだが、何か事件が起こりそうで心配だった。

沙由里は途中にあった自動販売機でスポーツドリンクを4本買い、天音に1本わたした。

「飲んだほうがいいわよ。脱水症状や日射病になっちゃう。」
一度休憩をとり、水分補給をすることにした。

自動販売機の横においてあるベンチ座ってすぐ、天音が電信柱を指差した。

「あれって、お兄ちゃんと刃矢人兄ちゃんじゃない？」

「え？」

そこには2人の搜索協力願いのビラが貼ってあった。

『探しています』

（このままだと2人が見つかったちゃう！）

沙由里と天音は休憩を早く済ませ、大急ぎでふれあい公園へと向かった。

それから5分ほど後、やっとふれあい公園に到着した。

待ち合わせの場所にいたのは、泣きそうな純と、意識のない刃矢人だった。

純は沙由里に気がつくと、わあっと泣き出した。

「脱水症状みたい。僕が早くこの水をわたさなかったからなんだ。」

沙由里は冷静に対応した。

「まず、刃矢人を日影に運びましょう。その前に、純君はこれを飲んでね。純君も危ない状態なんだから。」

そう言くと、さっき買ったスポーツドリンクを純にわたした。

沙由里は刃矢人を抱き上げ（少し重そうだったが）、木の影に連れて行った。

そして、少しずつスポーツドリンクを飲ませた。

「刃矢兄・・・ごめんね・・・。」

純にできることは、ただ謝り続けることだけだった。

第六話：天音救出作戦実行（前編）（後書き）

後編も必ず投稿するので、ぜひ読んでください！

第七話：天音救出作戦実行（後編）

時間は飛ぶように過ぎた。現在の時刻は4時37分。早くしないと、天音の捜索が始まるだろう。それまでに刃矢人の意識を回復させ、基地に戻らなくてはいけない。

「刃矢兄……。」

純は何度も必死で呼びかけた。

何回名前を呼んだだろう。刃矢人の意識が戻った。純は刃矢人に飛びついた。

「純、何泣いているんだよ」

あまりにも弱々しい声だった。だけど、彼がここにいるだけで、純は満足していた。

「早く基地に行きましょう。」

沙由里が口を開いた。微笑んでいる。それは、純に安心を与えてくれるものだった。

その後、刃矢人は体力を取り戻し、純と共に天音を基地まで連れてくることができた。沙由里は食材を買いに行き、そこからは何事も順調に進み始めた。

「刃矢兄ちゃん、沙由姉ちゃんはもう帰って来る？」

こんなほのぼのとした話題に入った頃だった。

ガザガザッ

侵入者を表す荒い草の音。純は天音を木の陰に隠し、音の主が来るのを待った。

「沙由姉じゃあないね」

「ああ……。」

緊張感が漂う。せつかく連れ出した天音を手放すわけにはいかなかった。

「おや？君達はいつかの・・・」

入って来たのは、天音を家に送った警察官だった。

「どうやら君達、家出をしていたみたいだね。家に帰りなさい。私が送ってあげよう」

警察官は手を差し出す。純は一步退いた。その時、刃矢人が叫んだ。
「もう同じ過ちは犯さない！純、天音を連れて逃げる！」

刃矢人は警察官の飛び掛って行った。勢いで大の大人を押し倒し、体重をかけた。

「さっさと逃げる！俺は後で行く！」

純は天音の手を引き、木の間を縫うように走った。途中で沙由里と合流し、助けてもらうつもりだった。しかし、彼女はまだ買物物をしてるらしく、基地の周りを探しても姿は見られなかった。

一方沙由里は、まだ胸騒ぎが治まらずにいるため、早く買物物を終わらせて店を出た。基地への道のりが妙に長く感じられる。

（何だろう、ものすごく良くないことが起こりそうな気がする）

思わず足の動きが早くなり、ついには走り出した。基地の前の角を曲がったところで純にぶつかり、やっと沙由里は止まった。

「純君に天音ちゃん・・・あれ、刃矢人は？」

純は今まであったことの一部始終を説明した。そのとたん、沙由里が悲鳴をあげた。

「それじゃあ刃矢人が連れて行かれちゃうわ！」

そして荷物をその場に置いたまま、走って森に飛び込んだ。純は木の陰で天音に荷物の番をさせ、沙由里を追った。

刃矢人は持ち前のすばしっこさで警察官から逃げ回っていた。しかし、その腕や脚、頬には無数の傷があり、血が流れていた。

「さあ来いよ。俺は負けないぜ」

警察官は挑発され、今にも飛び掛って行きそうだった。

「だったら行こうじゃないか！」

警察官の攻撃をひらりとかわした刃矢人は、すかさず石を投げつけた。警察官の右目の下に赤い線ができる。

「うっ」

相手がひるんだ隙に、刃矢人は自分のバッグからカッターナイフを取り出した。

「やめて刃矢兄！」

刃矢人はもはや正気ではなかった。刃矢人は純を後ろへ跳ね飛ばし、警察官を切りつけた。

「刃矢兄！」

それに続けて警察官を蹴った。警察官はあっけなく転がり、わずかに声を出した。

「お母様が知ったら、何ていうかな？」

わけがわからない純に、刃矢人が説明する。

「純、こいつはこの前の警察官を装った俺の兄貴の秀一だ」

秀一は純を見、鼻で笑った。

「兄貴、二度とここに来るな。無理なら二度と来れないようにしてやる」

刃矢人は狂ってしまった・・・？

秘密基地の一部が血で染まった。そこに横たわっている男性は、もう生きてはいなかった。

となりにいる少年は無表情のまま立ちつくした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3935a/>

家出孤児

2010年10月28日08時52分発行